

英語絵本の中の認知的道具

著者	脇本 聡美
雑誌名	神戸常盤大学紀要
号	10
ページ	89-97
発行年	2017-03-31
URL	http://doi.org/10.20608/00000395

原著

英語絵本の中の認知的道具

脇本 聡美¹⁾

Cognitive tools in English picture books

Satomi WAKIMOTO

要 旨

子どもに英語を教える (Teaching English to young learners; 以下 TEYL) ために、英語絵本は効果的な教材であるということは、多くの教員も研究者も指摘している。英語絵本がなぜ、どのように効果的であるのかについて、本稿では、Kieran Egan の認知的道具 (Cognitive tools; 以下 CTs) を活かした教育という観点から明らかにすることを試みる。話しことばを豊かに発達させる CTs を含む英語絵本を取り上げ、具体的にどのような CTs が絵本の中に埋め込まれているのかを指摘し、その CTs がどのように話しことばを発達させるかについて、Egan の提唱する想像力を触発する教育法 (Imaginative Approach; 以下 IA) を基に、英語絵本の TEYL における有用性を明らかにする。

キーワード：認知的道具 (CTs)、想像力を触発する教育法 (IA)、子どもに英語を教えること (TEYL)、英語絵本

Abstract

It is pointed out by many teachers and researchers that English picture books are effective materials for teaching English to young learners (TEYL). This paper attempts to show why and how English picture books are effective, based on the concept of cognitive tools (CTs) - found in Kieran Egan's Imaginative Approach (IA) - in education. Specifically, I look at CTs embedded in certain picture books and demonstrate how these CTs foster oral language according to Egan's IA. Thus, this paper aims to highlight the effectiveness of English picture books for TEYL.

Key words : cognitive tools (CTs), Imaginative Approach (IA), teaching English to young learners (TEYL), English picture books

1) 教育学部こども教育学科

1. はじめに

英語の早期学習については、賛否両論はあるが、関心が高まっている。2011年度から小学校で英語活動が必修となり、2020年度からは教科となることも予定されていることもその一因となっていると考えられる。TEYLのための様々な教材が開発される中、英語絵本が効果的な教材となるだろうということは、TEYLに携わる多くの者が感じている。実際、英語絵本のTEYLにおける有用性は複数の研究者^{1)~5)}によって指摘されている。第2言語としての子どもの英語学習における絵本の有用性については、アメリカの公立小学校での教員の経験を持つリーパー^{1)~3)}が、英語絵本の魅力を伝えながら、具体的な活動例を多く紹介している。Hsiu-Chih⁴⁾は絵本の言語的価値やストーリーと絵の有用性に加え、絵を解釈することで、子どもたちは文化的な気づきを体験していることを指摘し、畑江⁵⁾は、絵本を使った活動実践を示し、それが小学校「外国語活動」の目的に即していると述べている。

TEYL教材としての英語絵本の有効性は様々な観点から論じられてきているが、本稿では、Kieran Eganの教育理論の認知的道具を活かした教育という概念を基に、英語絵本のTEYLにおける有用性について明らかにすることを試みる。

2. 話しことばに関わる認知的道具

Egan⁶⁾は、学習の中心は学習者の想像力を触発することであると述べ、想像力を触発する教育法(IA)を提唱している。IAの中心となる概念は、学習者の感情に働きかけることで、想像力を触発し、それにより高まった学習者の思考の柔軟性や創造性が学習を促進するというものである。どの科目でも、学習する内容に学習者が感情的意味を見いだせたときに、想像力が触発され、学習効果を増大させるとEganは述べる。

もう一つのIAの基本的概念は、教育は主要な認知的道具に焦点をあてるべきだとしている点である。

認知的道具とは、ヴィゴツキーが言う”mediational means”(媒介手段)のようなものであるとEgan⁷⁾は述べており、知的発達を知的な道具の獲得であるとする点において、Eganはヴィゴツキーの影響を受けていると言及している。Egan⁶⁾は、認知的道具を、言語を中心に捉えており、学校教育で発達させるべき主要な認知的道具は、「話しことば(oral language)」、「書きことば(literacy)」、「理論的思考(theoretic thinking)」であるとする。「話しことば」を発達させる段階は子どもが話しことばを獲得してから、7~9歳くらい、つまり小学校低学年から中学年くらいまで、「書きことば」を発達させるのは、中学校を卒業する14~15歳くらいまで、「理論的思考」は高校や大学において獲得されるものだという。この言語を中心とした認知的道具には、それぞれに付随するもう少し小さな認知的道具(CTs)がある。そして、想像力や感情といった抽象的な概念を教室での学びに結びつけることを目指すIAは、その付随するCTsを学習に取り入れることで、学習者の感情に働きかけ、想像力を触発させ、主要なCTsである「話しことば」、「書きことば」、「理論的思考」を発達させることができると説く。

TEYLが対象としているのは、主に「話しことば」を発達させている学習者であるので、TEYLに活用できるCTsは「話しことば」に付随する道具ということになる。TEYLに活用するCTsとして、ストーリー(story)、比喩(metaphor)、対概念(binary opposites)、韻・リズム・パターン(rhyme, rhythm and pattern)冗談とユーモア(joke and humor)、イメージ(mental imagery)、ごっこ遊び(play)、謎(mystery)、生きた知識(living knowledge)、模倣と動き(mimesis and movement)ⁱ⁾を取り上げる。次のセクションでは、これらのCTsの中から、ストーリー、対概念、イメージ、韻・リズム・パターン、冗談とユーモア、謎、生きた知識を取り上げ、具体的にどのように絵本に埋め込まれているのかについて見ていきたい。

3. 英語絵本の中の認知的道具

3.1. ストーリー、対概念、イメージ

絵本は、物語と絵という二つの異なる要素からなる芸術作品である。松居¹²⁾によると、絵本は、物語という文学的要素と、絵画という美術的要素で構成される総合芸術であり、また、ニコラエヴァとスコット¹³⁾は、「絵本がほかに類を見ない芸術としてきわだっているのは、“絵”と“ことば”という二つの異なる種類のコミュニケーション方法が組み合わさってできていることによる」と述べている。これをCTsという視点からみると、絵本には、ストーリーCT (a cognitive toolとしてのストーリー) とイメージCTが含まれているということになる。Egan⁶⁾によると、ストーリーCTは、私たちの感情を方向づけ、想像力を触発して学ぶべき知識と取り組むことを可能にする強力なCTである。そして、多くのストーリーCTは、対概念CTと深く関わり合う。というのは、多くの物語は、相対する概念で構成されるからである¹⁴⁾。

例えば、Leo Lionniの*Swimmy*¹⁵⁾には、孤独 / 連帯 (loneliness / solidarity)、怯え / 勇敢 (scariness / bravery) という対概念が見られる。巨大なマグロに仲間を食われ、ひとりぼっちになってしまったSwimmyは、怯えながら、寂しく、悲しい (scared, lonely and very sad) 気持ちで、海をさまようが、海に住む様々なすてきで不思議な生物 (wonderful creatures) に会おううちに、元気になり、新たな仲間に出会う。以前のSwimmyのように大きな魚におびえる仲間を励まし、彼の知恵で仲間と力を合わせ、大きな魚に打ち勝つという物語は、前述の強力な対概念によって、読み手の感情に働きかけ、生き方や人生についての強いメッセージを届ける。すべての絵本作品に*Swimmy*が伝えるような力強いメッセージを生み出す対概念が必須なわけではない。もっと身近で、日々の生活の中で私たちが接するような対概念を含む作品も多くある。例えば、日本では『コロちゃんはどこ?』で知られているEric Hillの*Where's Spot?*¹⁶⁾は、お母さん犬のSally

が仔犬のSpotを家の中で探し回るという内容の仕掛け絵本で、物語は、探す / 見つける (search / find) という対概念で構成される。このように、多くの絵本のストーリーCTは対概念CTにより構成されており、この二つのCTsは深く関わりあっている。

もう一つの絵本の構成要素である挿絵は、読み手が絵本の世界や物語のイメージを作り出すことに大きな役割を果たしている。Eganの言うイメージCTとは、ことばを使い心に描くイメージなのだが、画像や映像のような視覚的イメージのみを指すわけではない。私たちは心のなかに生み出されるイメージCTを使い、考えることと感じることを同時に行うとEgan⁶⁾が述べているように、ことばからイメージを描くことで、私たちは、自分の世界や経験を理解したり、思考することを行っている。絵本の挿絵は視覚的イメージであるが、それは、物語と調和し、補完し合い、ことばによって生み出されるイメージCTと重なり合い、私たち自身が心の中にイメージCTを生み出す力を育てる働きをする。絵本における絵の効力や働きについては、多くの研究があるが、絵本の絵は、物語の世界のイメージを読み手に伝える役割と、そのイメージを受け取った読み手が、ことばで語られる物語とともに心の中に新たなイメージを描き出す力を育む働きがあると考えられる。例えば、後述するLudwig Bemelmansの*Madeline*シリーズの挿絵は、パリに行ったことがなくても、この絵本の読者がパリの街がどんなところか理解しようとイメージを描くのを容易にするだろう。前述の*Swimmy*は、暗くて恐ろしい海の中の世界、様々な生物の宝庫である豊かな海、恐怖や孤独、勇気と仲間といった概念を理解するために心の中に描き出すイメージの源になり得るだろう。このように、心の中で生み出されたイメージCTは、話しことばによる思考や理解を豊かに成長させる認知的道具の一つとなる。

3.2. 韻・リズム・パターン

ことばの音楽性に関わるCTは、外国語を学ぶと

きには特に意識しなくてはならない道具だろう。限られたインプットしか与えられない EFL (English as a foreign language) 環境ⁱⁱでの TEYL では、英語の音楽的要素を習得するのは難しい。加えて、日本での EFL は、主に「書きことば」として英語が学習されてきたため、韻・リズム・パターンといった言語の音楽的要素は、訳読法中心で試験のための英語学習においては、ちょっとした息抜きやおまけのようにならざるを得なかったと言っても過言ではない。そのような英語学習の環境では、目標言語である英語の音楽的要素を子どもに教えることは、TEYL における英語の音声面の学習の重要性を理解している教員にとっても、容易なことではない。しかし、そもそも、言語の音楽性がどのように私たちの理解や思考のために使われる道具として役立つのだろう。Egan¹⁷⁾では、CT としてのことばの音楽的要素について次のように指摘されている。どんな話しことば中心の文化においても、韻・リズム・パターンは、大切な知識や情報を記憶し、記憶に留めておくことにとっても効果的であった。そして、学習においてはどんな学習内容も意味深く、覚えやすく、魅力的にする力のある道具となる。このように、ことばの音楽的要素もまた、知識や情報の記憶という知的は道具としての重要な役割を担っている。

それぞれの言語には、その言語特有の心地よいリズムがある。アレン玉井¹⁸⁾によると、英語には、超文節的特徴 (suprasegmental features) と呼ばれる、リンキング (連結する発音) やリズムやイントネーションといった特徴があり、これらの特徴が英語らしいひびきを作り出す。リンキングとは、子音で終わっている単語の次に母音で始まる単語が続く場合、前の単語の最後の子音と次の単語の最初の母音がつながって発音され、複数の単語がつながって1つの音のかたまりのようになることを言う。英語のリズムは強く読まれる音節と弱い音節の組み合わせによって生まれる。また、強く読まれる部分が文の中ではほぼ同じ時間間隔で現れ、これを等時間隔性 (isochronism) と呼ぶ。次に英語の韻 (rhyme) について説明する。英単語は、頭子音 (onset) とライム

(rime) に分けられる。例えば、英語母語話者にとって、bed は、b /b/ (onset) と ed /ed/ (rime) の音に分けるのが自然な分け方になる。英語の韻 (rhyme) はライム (rime) が同じ単語から成る。同じライム (rime) のことば (bed, red など) は rhyming words と呼ばれる。Rhyming words は、音のひびきを印象深く、耳に残りやすくするというだけでなく、英語を読む力につながる英語の音韻認識 (phonological awareness) や音素認識 (phonemic awareness) を養うのに大きな役割を果たす^{19) 20)}。最後に、パターンは、日本の絵本にもよく見られるように、同じフレーズや文の繰り返しによって作られる。

それでは具体的に、これらの英語の音声的特徴の韻・リズム・パターンが英語絵本の中にどのように出てくるのかについて、作品を取り上げながら見ていきたい。Dr. Suess の作品には、*The Cat in the Hat*²¹⁾, *Hop on Pop*²²⁾ など韻をふんだん取り入れられているものが多い。例えば、UP/ PUP/ Pup is up. CUP/ PUP/ Pup in cup. (*Hop on Pop*) といったように、rhyming words が並べられ、声に出して読んでみると、リズムがよく、読み手や聞き手を楽しませてくれるところが作品の特徴となっている。

Madeline が主人公の Ludwig Bemelmans の一連の作品には、英詩でよく用いられる、rhyming couplet (押韻、韻律 (meter) がほぼ等しい対句) が効果的に使われている。シリーズ最初の作品 *Madeline*²³⁾ (『元気なマドレーヌ』) では、Madeline が夜中にお腹が痛いと言出し、医者の方の Cohn 先生が呼ばれるシーンは次のように語られる。

and he dialed: DANton-ten-six -
 "Nurse," he said, "it's an appendix!"
 Everybody had to cry -
 not a single eye was dry.
 Madeline was in his arm
 in a blanket safe and warm

1, 2 行目の six/ appendix、3, 4 行目の cry /

dry、5, 6行目の arm /warm は、rhyming words で、それぞれの2行の音節の数はほぼ等しい。このように、作品を通して、rhyming words や rhyming couplet が豊富に使われている Madeline のシリーズは、小さいけれど誰よりおてんばな Madeline が引き起こす出来事がおもしろいうえに、その語りを声に出して読んでみると、英語のリズムが楽しく、耳に残り、作品を印象深いものにする。

リンキングやイントネーションは、比較的、聞いた通りに模倣がしやすいため、スキットの会話文などからも習得できる。しかし、会話文の練習のみで英語特有の等時間隔性のリズムを捉えることは簡単ではない。等時間隔性のリズムをつけて読んでみやすい作品として、Bill Martin Jr. と Eric Carle の *Brown Bear Brown Bear, What Do You See?*²⁴⁾ を挙げたい。この作品はタイトルになっているフレーズが繰り返されるので、パターンが特徴の絵本でもあるのだが、パターンフレーズを、黒丸の音節に強勢を置いて声に出してみると、等時間隔性のリズムを取りながら読むということがしやすく、その等時間隔性のリズムがどういうものなのか把握しやすく、何より耳に残る。

● ● ● ● ● ●

Brown bear, brown bear, what do you see?

● ● ● ● ●

I see a red bird looking at me.

パターンが含まれる作品も紹介しよう。日本の絵本でも、同じフレーズが繰り返されるパターンを取り入れた作品はたくさんあるが、それは英語絵本にも当てはまる。前述の *Brown Bear* や、Eileen Christelow の *Five Little Monkeys Jumping on the Bed*²⁵⁾、Laura Vaccaro Seeger の *Lemons Are Not Red*²⁶⁾ などともパターンが使われている作品だ。

このように、韻・リズム・パターンCTが埋め込まれた英語絵本は数多くある。ことばの音楽性は読み手の感情に働きかけ、作品を記憶に残し、印象的なものにする役割を果たしている。外国語を習得す

るのに、そのことばの音の特徴を学ぶことは、目標言語らしく話せるようになるためだけではなく、話しことばを発達させる認知的道具を身につけることにもつながる。英語絵本を何度も音読し、その音楽性を楽しむことが、英語絵本を使って韻・リズム・パターンCTを獲得するには、最適な方法だと言えるだろう。

3.3. 冗談とユーモア

冗談とユーモアのCTとしての働きを Egan²⁷⁾ は次のように説明する。冗談やユーモアは、ことばを新しい見かたで捉えることを促したり、意識させたりすることにより、子どもたちの知的発達に大切な「メタ認知的意識」を発達させる。つまり、ことばで表されていることを、違う角度から捉えようとする能力を育てる。これは、たとえば、なぜなぞを何か一つ思い浮かべてみると分かりやすいだろう。なぜなぞは、文字通りの意味に囚われていては解くことができない。答えを出すには、発想の転換が必要となる。このような視点から見ると、冗談とユーモアCTは、ことばで遊んだり楽しんだりしながら、物事を柔軟に捉える思考を育てる知的な道具だと考えられる。

絵本の多くは、冗談やユーモアに満ち溢れている。そのような英語絵本から Nick Sharratt の作品を1つ紹介したい。Sharratt の作品は、ユーモアたっぷりなのだが、韻・リズム・パターンCTもうまく取り入れられている。例えば、*Shark in the Park*²⁸⁾ は、ページの真ん中に丸い穴が空いていて、公園にいる Timothy Pope という男の子がおもちゃの望遠鏡でいろいろなところを見るという設定になっている。望遠鏡で見える丸い部分には、サメのヒレらしき黒いものが写っていて、Timothy は「公園にサメがいる！」と叫び、読み手はそれがいったい何なのかワクワクしながらページをめくる。すると、それは実は黒猫の耳の先だったり、カラスの翼の先だったりする。望遠鏡のレンズを通して見えたと思ったものが（ここでは、恐ろしいサメのヒレ）が、実は全く違うものだったというエピソードには、限ら

れた視野で見て認識したものが、レンズを外し全体を捉えると、全く違う様相を示すことがあるというメッセージを読み取ることもできる。また、公園にサメ！と思い込んでしまった Timothy がどこを見ても、サメを見つけてしまうというエピソードから、思い込みが視覚に与える影響の大きさが面白おかしく伝わってくる。さらに、Timothy が望遠鏡を覗いているシーンでは毎回、” Timothy Pope, Timothy Pose is looking through his telescope. He looks at the sky. He looks at the ground. He looks left and right. He looks all around. And this is what he sees.” というナレーションが入り、Timothy は毎回 ” THERE’ S /A SHARK/ IN THE PARK!” と叫ぶ。つまり、ここにはパターンと shark / park の rhyming words が見られる。そして、この作品は、小さなレンズを通して見える世界と、レンズ無しで見る世界の両方を描くことで、目に映るもの / 実際の姿、という対概念 CT で構成されていると考えられる。最後に Timothy がサメのヒレと思ったものが、ページをめくり、実はお父さんの髪の毛だったというユーモアたっぷりのエンディングには、思わずクスッと笑ってしまう。このように、*Shark in the Park* は、見かたによって物事は違った様相を示すことがあるというメッセージを、冗談とユーモア CT や韻・パターン CT を取り入れ、読者に伝える英語絵本だ。そして、” It’ s safe to say there are no sharks in the park today!” と安心して家に向かう Timothy の後ろにある公園の小さな池には、アヒルと例の黒いヒレが浮かんでいて、絵本を見ている子どもたちに、「あれっ？」と思わすような謎を残して終わる。

3.4. 謎

謎は、私たちの世界には、目で見たり、耳で聞いたりする以上のものがあることを私たちに気付かせ、私たちの理解を深める大切な道具だと Egan²⁹⁾ は述べる。確かに、不思議だと思う感覚は、私たちの好奇心を刺激し、探究心を呼び起こす。謎 CT を取り入れた英語絵本も少なくない。ここでは、Lois

Ehlert の *Color Zoo*³⁰⁾ を紹介したい。この絵本は、lion, ox, monkey snake といった動物と、様々な色の circle, square, diamond, heart といった形のみで構成されている。いろいろな形を重ね合わせて動物の顔が作られているのだが、ページをめくって一番上の形を取り除くと、別の動物の顔が出てくるという、創造性溢れる作品だ。ページをめくって一つ形をとるごとに、次は何の動物が出てくるだろうというワクワク感を高める謎と、シンプルな形と色のみで、いろいろな動物を作り出すことができる不思議さで、作品をとっても印象深いものにしている。四角や丸やひし形といった日常生活のどこにでもある形が秘めている可能性を目にし、読み手の好奇心を刺激する。

3.5. 生きた知識

生きた知識と聞くと、それは日常生活に役立つ知識のように聞こえるかもしれないが、Egan³¹⁾ は、それは、子どもたちの energetic language だと述べている。つまり、子どもである学習者の身近にあって、彼らの興味をそそる、教室や学びの場には、ふさわしくないとされることもあるような、子どもが遊びの中で使うことばや、流行りの言い回しなどを意味している。ここでは、冗談とユーモア CT のセクションでも紹介した Nick Sharratt の作品 *What’s in the Witch’s Kitchen?*³²⁾ を取り上げたい。この絵本は仕掛け絵本になっており、魔女の家のキッチンの冷蔵庫、オープン、ティーポットなどの中には、それぞれ2つのものが潜んでいる。仕掛けは、左右か上下に開くようになっていて、そのどちらか一方には、おいしいもの、もう一方にはおどろおどろしいものが隠れている。つまり、これは対概念 CT で構成されているストーリーということにもなるのだが、例えば、ティーポットのページのナレーションを引用して、そこに埋め込まれている CTs に着目したい。

What's' brewing
in the
Witch's kitchen?
Open it left or open it right,
It might not be dreadful
but then it just might!

What's ~ in the witch's kitchen? の部分と Open it left or open it right, (上下に開く仕掛けのページは、Open it up or open it down が使われている) が毎ページに出てくるパターンになっており、right (もしくは down) は、その2行下の最後の単語と rhyming words になっている (上記の引用部分では、right/ might)。イントネーションとリンキングも取り入れて、声に出して読んでみると、等時間隔性のリズムも取りやすい。つまり、韻・リズム・パターン CT も効果的に使われている絵本ということにもなる。そして、ティーポットに隠れているものだが、左に開くと” Nice strawberry tea!”が出てくる。右に開いてしまうと” Nasty Goblin's wee!” が待っていて、たいていの子どもは思わず笑ってしまうだろう。このように、*What's in the Witch's Kitchen?* には、ストーリー、対概念、イメージ、韻・リズム・パターン、冗談とユーモア、謎、生きた知識と多くの CTs が埋め込まれていて、子どもを楽しませながら、話しことばを豊かにする英語絵本だということがわかる。

3.6. 模倣と動き

Egan³³⁾によると、話しことばを獲得する前の子どもは、身体を使って自分の世界や経験の意味づけをしている。その身体を使った理解にも、その理解の仕方を豊かにする道具がある。身体を使った理解は、話しことばを獲得したために消えてしまうというわけではなく、それは使い続けられる。むしろ、知的に発達が進んで、失ってしまうより、できるだけ身体を使った理解は生き生きと残していく方が望ましいと Egan は述べる。Chodakowski & Egan⁹⁾は、身体を使った理解に関連する道具を body's

toolkit と呼んでおり、本研究では、その中の一つである意図的な模倣 (mimetic intentionality) を模倣と動き CT として、TEYL のための CT に取り入れた。外国語を習得するのに、模倣は重要だが、そこには身体を動かすことが不可欠である。なぜなら、声を出すこと自体、身体を使うことであるし、TPR と呼ばれる全身反応教授法 (Total physical response)ⁱⁱⁱ が提唱するように、身体を動かしながら外国語を学習することで、学習効果が上がると考えられるからである。模倣と動き CT を読者にうまく使わせる英語絵本が、Eric Carle の *From Head to Toe*³⁵⁾ だ。この作品には、penguin、giraffe、donkey、gorilla など様々な動物と、その動物が行ういろいろな動作を表す表現が出てくる。最初に出てくるのは penguin で、子どもに次のように語りかける “I am a penguin/ and I turn my head./ Can you do it?” そして絵本の中の子どもは “I can do it!” と答える。Eric Carle の絵は、色が鮮やかで、動物もその動作も大きく躍動感がある。ページを進めていくうちに、聞き手の子どもたちには、” Can you do it?” という動物からの問いかけがまるで自分たちへの問いかけのように感じられ、子どもたちに、思わず絵本のセリフと一緒に “I can do it!” と答えながら、イラストに描かれる、頭を横に向けたり、首を曲げたり、足を蹴り上げるといった動作を思わずさせてしまうような作品である^{iv}。このように、*From Head to Toe* は、挿絵と語りが発する問いかけにより、絵本に描かれる動作を、絵本を聞いている子どもが模倣して身体を動かし、楽しみながらストーリーをより深く理解することができる作品であることがわかる。

4. まとめ

上述の通り、英語絵本には、話しことばを発達させる CTs が多く埋め込まれている。これらの CTs は、子どもの感情に働きかけ、想像力を触発し、児童の知的柔軟性を高めることで母語を豊かに育ててきた。そのような CTs を豊富に含む英語絵本を教材として TEYL に取り入れることで、母語を豊かにして

きた CTs が TEYL においても子どもの第二言語を豊かにすることが期待できると考える。

本稿では、TEYL における絵本の有用性を、Egan の教育理論 IA の認知的道具を活かした教育という概念から明らかにすることを試みた。Egan は、CTs によってことばを豊かにすることが知的発達であり、効果的な教育は CTs によって学習者の感情に働きかけ、想像力を触発することである主張する。その観点から、本研究では、英語絵本に埋め込まれている CTs を指摘し、それらがどのように子どもの感情に働きかけ、話しことばを豊かにすることができるのかを具体的に論じた。第二言語習得は、母語習得と全く同じプロセスであるとはみなすことはできない。しかし、外国語学習においても、母語を豊かに発達させてきた知的な道具を使い、ことばを豊かにすることで第二言語を獲得するという発想を取り入れることは、TEYL にも EFL 環境の英語学習にも新たな可能性をもたらすことになるのではないだろうか。

今後は、次の 2 点について研究を進めていきたい。まず、本稿で明らかにした TEYL の教材としての英語絵本の有効性を理論的基盤とした TEYL の実践を行い、その効果の検証を試みたい。次に、初等教育教員養成課程の学生に IA 及び CTs の概念を提示し、彼らが子どもの第二言語習得について理解を深め、実践に結びつけていけるような養成課程プログラムの開発を目指したい。

脚注

i) Egan⁶⁾、Chodakowski & Egan⁹⁾、Judson & Egan¹⁰⁾ で挙げられている CTs, body's toolkit から選択した。脇本¹¹⁾ で、それぞれの CTs がどのようにことばの発達に関わるかについてまとめている。

ii) 英語が外国語として使われる環境。英語が日常

生活の中で使われる環境は ESL (English as a second language) 環境。

- iii) TPR は、アメリカの応用言語学者 Asher によって開発されたリスニング技能を伸ばすための教授法で TEYL ではよく使われている。目標言語で出された指示に、子どもは身体を動かし反応する。リスニングだけでなく、体を同時に動かすことで学習効果を上げようというもの³⁴⁾。
- iv) 実際、筆者が 5 歳から 6 歳の幼稚園児にこの英語絵本を読み聞かせたとき、園児たちは、始めは黙って聞いているだけであったが、ページを進めていくうちに、“I can do it!” は一緒に口ずさむようになり、こちらから促すと、動物の絵と同じ動作をして楽しんでいた。

参考文献

- 1) リーパー・すみ子・『えほんで楽しむ英語の世界』。一声社, 2003, 177.
- 2) リーパー・すみ子・『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている—英語が話せない子どものための英語習得プログラム ライミング編』。径書房, 2008, 141.
- 3) リーパー・すみ子・『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている—英語が話せない子どものための英語習得プログラム ガイデッド・リーディング編』。径書房, 2011, 224.
- 4) Hsiu-Chih, Sheu. The value of English picture story books. *ELT Journal*. 2008, 62(1), 47-55.
- 5) 畑江美佳・「小学校外国語活動における「英語絵本」の活用—コミュニケーション能力の素道を育むために—」。四国英語教育学会『紀要』。2012, 32, 17-28
- 6) Egan, K. *An imaginative approach to teaching*. Jossey-Bass, 2005, 251.

- 7) Egan, K. *The educated mind: How cognitive tools shape our understanding*. The University of Chicago Press, 1997, 299.
- 8) Egan, K. *Teaching literacy*. Corwin Press, 2006, 163.
- 9) Chodakowski, A. & Egan, K. The body's role in our intellectual education. Retrieved from <http://ierg.ca/wp-content/uploads/2014/01/IERGBodyrole.pdf> (September 3, 2015)
- 10) Judson, G and Egan, K. Engaging students' imaginations in second language learning. *Studies in Second Language Learning and Teaching*. 2013, 3(3), 343-56.
- 11) 脇本聡美. The imaginative approach as a conceptual basis for elementary foreign language teacher education. 神戸常盤大学紀要. 2016, 9, 13-22.
- 12) 松居直. 『絵本とは何か』. 日本エディタースクール出版部. 1973、2003, 386.
- 13) Maria Nikolaijeva & Carole Scott. *How Picturebooks Work*. Routledge, 2001.
川端有子 / 南隆太 (訳). 『絵本の力学』. 玉川大学出版部. 2011, 416.
- 14) Egan, K. *Teaching as story telling*. The University of Chicago Press, 1986, 26-8.
- 15) Lionni, Leo. *Swimmy*. Dragonfly Books, 1973.
- 16) Hill. E. *Where's Spot?* G.P. Putnam's Sons, 1980.
- 17) Egan, K. 前掲書 6) . 19-22.
- 18) アレン玉井光江. 『小学校英語の教育法 理論と実践』. 大修館書店, 2010, 91-3.
- 19) リーバー. 前掲書 2) . 12-8.
- 20) アレン玉井. 前掲書 18) . 145-51.
- 21) Dr. Suess. *The Cat in the Hat*. Random House, 1957; 1985.
- 22) Dr. Suess. *Hop on Pop*. Random House, 1963; 1991.
- 23) Bemelmans, L. *Madeline*. The Viking Press, 1937; 1967.
- 24) Martin Jr. B. & Carle E. *Brown Bear Brown Bear, What Do You See?* Henry Holt Company, 1967; 1995.
- 25) Christelow, E. *Five Little Monkeys Jumping on the Bed*. Clarion Books, 1989.
- 26) Seeger, L. V. *Lemons Are Not Red*. Roaring Brook Press, 2004.
- 27) Egan, K. 前掲書 6) . 22-6.
- 28) Sharratt, N. *Shark in the Park!* Random House, 2000; 2002.
- 29) Egan, K. 前掲書 6) . 32-4.
- 30) Ehlert, L. *Color Zoo*. Harper Collins Publishers, 1989.
- 31) Egan, K. 前掲書 8) . 51-6.
- 32) Sharratt, N. *What's in the Witch's Kitchen?* Walker Books, 2009.
- 33) Egan, K. 前掲書 7) . 162-8.
- 34) アレン玉井. 前掲書 18) . 79-81.
- 35) Carle E. *From Head to Toe*. Harper Collins Publishers, 1997.

